地域の宝
但馬牛物語
★37★

削蹄しながら技術伝承

渡辺　大直

弁当を忘れ、牧場公園内のレストランに昼食を食べに行ったときだった。若手の畜産農家が10人ほど食事をしていた。「ヤアお揃いだなァ」と声をかけると、今日は〝削蹄会〟だという。

削蹄とは牛のツメ切りのことだ。蹄は体重を支える重要な器官で、蹄が伸びると牛は正しい姿勢が保てなくなり、脚を痛めたり、体調を崩したりする。

牛を使役に使い、放牧して山野を歩きまわらせると、自然に蹄は削れる。しかし使役に使うことがなくなり、牛舎で飼うことが多くなった現在、蹄は伸び放題になってしまう。このため、削蹄は牛を飼う上で欠かせない大事な作業となっている。

蹄鉄をつけて走る競走馬の世界には〝装蹄師〟という専門職がいる。同様に、牛の削蹄をするには〝削蹄師〟の資格が必要となる。蹄の削り方によって立ち方や姿勢が変わるので、高い技術と経験が求められ、とても気を遣う作業でもある。それに、牛の足を上げ、膝の上に抱え込むようにして蹄の裏を削るので、かなり体力が要る。

削蹄会は、削蹄技術を持った若手の畜産農家の組織で、町内の牛の削蹄をして回る活動をしているという。削蹄の様子を見せてもらえないかと頼むと快く引き受けてくれた。

当日、削蹄を行う牛舎の主はニコニコ笑いながら「30年程前になるかなァ。ワシら若いモンで温泉町削蹄会をつくったんだ。削蹄に行くことで、よその牛や飼い方を見ることができ、よい勉強になった」と話してくれた。同じ話は、今のメンバーからも聞いた。

手際よく牛の蹄を削る削蹄会のメンバー

削蹄会のメンバーはテキパキと牛を引き出し、柱に繋いで削蹄をしていく。しかし動かない牛や足を上げない牛もいる。また硬いコンクリートの上で飼われている繁殖牛と厚くオガクズを敷いた柔らかい床で飼われている肥育牛では蹄の伸び方が違う。中には蹄の一部が腐っている牛もいて、1頭ずつ状況が異なり、てこずる牛もいる。

すると先輩がアドバイスする。また若い後輩は牛を保定しながら先輩の削蹄のしかたをじっと見ている。削蹄作業をしながら交わされる楽しい会話の中には、牛の体形や系統、更には相場の話なども交じってくる。削蹄会は若い牛飼いたちの技術伝承や情報交流、仲間づくりの場でもあるようだ。

削蹄作業を取材しようと思っただけだが、オヤジさんたちの世代がつくった削蹄会が息子たちの世代に引き継がれ、その削蹄会で、但馬牛を飼う技術や知恵が伝承され、後継者が育っている。伝統が築かれていく一場面を垣間見る幸運に出会ったようだ。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます